

二〇二五年度B

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから31ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

以下の文章は、評論家・思想家の*柳宗悦が一九四一（昭和一六）年に発表した『民藝とは何か』という本からの抜粋です。抜粋にあたっては、読みやすさを優先して、原文の旧字体を新字体に、一部の漢字をひらがなにあらためています。ただし、「工藝」（こうげい）「民藝」（みんげい）という語についてのみ、文章の趣旨を勘案し、旧字体のままとしています。

一 民藝とはいかなる意味か

① 工藝の諸問題のうちで、過去に対しても将来に向かつて、一番意味深い対象となるのは民藝の問題なのです。美の問題からしても経済の問題からしても、これ以上に根本的な工藝問題はないのです。何故なら工藝の鑑賞に浸る時、またはその真理を追求する時、誰もこの領域に帰って来るからです。「民藝品たること」と「工藝品たること」との間には、密接な関係が潜むからです。工藝が実用を生命とする限り、民藝をこそ工藝中の工藝と呼ばねばなりません。それ故^{ゆえ}何人もこの問題に触れることなくしては、工藝論を組み立てることができないのです。

しかるに今日までこの領域が真理問題として明確に取り扱われたことはないのです。もし正當にその意義が認識せられたら、工藝の歩むべき方向について、またそれを顧みるべき批判の原理について、一つの標的を捕え得るでしょう。だが多くの人々にとって、それは見慣れない世界であるに違いないのです。それ故私はできるだけ^aヘイイな言葉のうちに、順を追って目撃した真理を記してゆこうと思うのです。恐らく何事よりも字句の意味から筆を起すのが至当かと思われます。

民藝とは民衆が日々用いる工藝品との義です。それ故、実用的工藝品の中で、最も深く人間の生活に交わる品物の領域です。俗語でかかるものを「下手」な品と呼ぶことがあります。ここに「下」とは「並」の意。「手」は「質」とか「類」とかの謂。それ故民藝とは民器であつて、普通の品物、すなわち日常の生活と切り離せないものを指すのです。

それ故、ふだん使いにするもの、誰でも日々用いるもの、毎日の衣食住に直接必要な品々。そういうものを民藝品と呼ぶのです。

A 珍しいものではなく、たくさん作られるもの、誰もの目に触れるもの、安く買えるもの、何処にでもあるもの、それが民藝品なのです。それ故恐らくこれに一番近い言葉は「雑器」という二字です。昔はこれ等のあるものを雑具とも呼びました。

A かかるものは富豪貴族の生活には自然縁が薄く、一般民衆の生活に一層親しい関係をもっています。それ故、実用品の代表的なものは「民藝品」です。 B 御殿は王侯の造営物であり、民家は民衆の建物でいわば建物の中の民藝です。 B

金地襖の彩画は貴族的な絵ですが、大津絵の如きは「民画」とも呼ぶべくいわば民間の画です。民家、民器、民画、私はそれ等のものを総称して「民藝」と呼ぼうと思います。

しかし民藝品はごく普通のもの、いわゆる上等でないものを指すため、ひいては粗末なもの、下等なものという連想を与えました。実際高級な品、すなわち上等品に対してこの言葉を用いる時が多いため、雑器など云々と、^b プベツの意に転じています。つまらぬもの、やくざなもの、安ものを意味しています。このためか今日まで民藝品は工藝史の中に正当な位置をもつことができず、愛を以て顧みる者がほとんどなかったのです。

ですがこれは官尊民卑の余弊とも云いましょうか。富貴なものにのみ美を認める見方は、極めて貧しい習慣に過ぎないのです。ごく並のものであるから、外形の上や用途の上では、上等でないかも知れませぬが、美から云つても粗末だというのは、^③ 許し難い不注意なのです。私はこれからそういう粗悪だという連想が、はなはだ間違っているということを、^c 漸次に述べようとするのです。それ故「つまらぬもの」という粗雑な見方を取り去るために、どうしても民藝の性質を正しく解しておかねばなりません。

さて、民衆的工藝と貴族的工藝と、どういう区別があるか、その性質の違いはどこにあるか。大体左の通りに考えてくださつてい

いのです。民藝品は民間から生まれ、主に民間で使われるもの。したがって作者は C の職人であり、作物にも別に銘はありません。作られる数もはなはだ多く、価格もまた低く、用いられる場所も多くは家族の住む居間やまた台所。いわゆる「手廻り物」とか「勝手道具」とか呼ばれるものが多く、自然姿も質素であり D になりま^dす。作る折の心の状態も極めて無心なのです。とりわけ美意識等から工夫されるものではありません。材料も天然物であり、それも多くはその土地の物資なのです。目的も皆実用品で、直接日々の生活に必要なものばかりなのです。製作の組織は多くは*組合。これが民藝の世界なのです。

これに対し貴族的なものは、上等品であり貴重品です。したがって数は多くできず、また金額も高価になります。作る者は多くは E 。それ故、器には在銘のものが多^eいのです。用いる人は貴族や富者です。実用品というよりも飾り物が多く、必然置かれる場所も客間や床の間。姿は絢爛^{けんらん}であり、丹念であり、 F なのです。技巧は E セイチを誇り、作者者も工夫し加工し、意識して作ります。材料も珍しきもの、精製したの^eとを選びます。製作の組織は多くは官や富者の保護によりま^eす。こういうもの^eの^eがいわゆる貴族品の性質なのです。俗語でこれ等のものを「上手物」と云いますが、これはもとより「下手物」に対する言葉なのです。

一方が「民」なら、一方は「官」です。一方を民本的と云い得るなら、他は貴族的なのです。前者を協团的と云い得るなら、後者は個人的とも云えます。一つは「通常」の世界に住み、一つは「特殊」の世界に活^いきます。一方は「無想」に生まれ、一方は「有想」に発し、前者は「平常心」を示し、後者は「分別心」を語ります。

あるいはこれ等の対比を、実用を旨としてできる「工藝」と、美を旨としてできる「工藝美術」とに分けてくださってもいいのです。前者は生活と直接関係があるものであり、後者はむしろ生活を遊離したものとなつてきます。したがって一方は民衆の生活と交わり、他方は富貴の生活に入つてゆきます。自然前者が民藝の世界であり、後者が特別品の領域となります。

または作る者の側から見て、これ等の区別を職人の作と、美術家の作とに分けて考えてくださってもいいわけです。例えば同じ茶器と云いまして、いわゆる「井戸」は前者であり、「楽」は後者なのです。よしその二つの間に形の近似があつても、全く出発が

異なるのです。一方はその地方の、またはその時代の誰でもが携わったものであり、他方は美意識を有った特殊な作者のみの世界なのです。私達たちはそれ等の二つを一つの世界で説くことはできないのです。

あるいはこれを心の側から見て、伝統的な心と、自由な心とに分けてくださってもいいわけです。それ故前者はその背後に積み重ねられた過去の知恵を負います。後者はどこまでも自己を中心として歩みを進めて行きます。例を西洋にとればゴシックの心は伝統の心でした。だがルネサンス以後は自由の心が主張されました。仮に東洋の彫刻に例をとるなら、同じ仏像でも推古のものは伝統的です。ですが今日展覧会に出るものは個人的です。一方は自我が従であり、他方は主となるからです。④ 同じように民器しきと然らざるものとは心の置き場が異なるのです。私達は工藝の美を見る上において、まずこれ等の区別をつけることが緊要なのです。

これ等の対比によつて、ほぼ民衆的な器物と貴族的なものとの差異やその特質が分明にされたことと思います。しかしこれ等の二つのものを前に見て、今の歴史家や鑑賞家達が、いずれに多く工藝美を認めているかという点、全く後者なのです。前者を見る場合でも後者の眼めで見ているのです。また個人作家がその製作によつて吾々われわれに示すものも、必然後者すなわち高価な特別な品物なのです。この趨勢すうせいの間に伍ごして、閑却かんきやくせられた民藝の価値を私は語ろうとします。なぜ語るに足りるか、語るべきであるか、語らねばならぬか。私は続く幾つかの章で、それ等の理由を逐次に述べようと思います。

二 何故なにゆえ特に民藝が論ぜられねばならぬか

なぜ沈黙を破つて、あえて民藝の意義を語らねばならないのであるか。四つの理由を私は挙げたいのです。

(一) 民藝品の美しさがほとんど全く認められていないからです。ましてそれが示す性質とか意義とかが、少しも注意されていないからです。工藝史を見ても収集を見ても、民藝品がいかに顧みられていないかに驚きを感じます。民藝品は何も珍しいものではありませんから、誰もそれを見また知っているはずなのです。それなのに未だに正しい認識いまだがそれに向かつて加えられてはいないのです。

一つには余り見慣れているが故に、特に見なおさないのだとも思えます。加うるに、^⑤一般の美への見方は因襲的であつて創造がありません。私があえて民藝の世界を語るのは、人々が余りにその美に向かつて眼を開いていないからです。明らかな美しさがあるにもかかわらず、専門的批評家すらそれを歴史に語ろうとはしていません。ましてそれが示す深い工藝上の意義を^{*}闡明した人はないのです。進んではそれ等のものを粗野とか粗末とか云つて、退けるようにさえ見えます。この許し難い盲目が跋扈するが故に、私は虐げられた民器のために弁護の位置に起こつたのです。それ故これは当然認められるべきであつて、しかも認められない不遇なものへの弁明なのです。

温室の花をのみ美しい花と見る時、人々はしばしば野の花の美しさを忘れました。その加工せられた贅沢な富貴を誇る花にもある美しさがあります。しかし自然の光に浴するあの活々とした野花の美を忘れるのは、正しい見方ででしょうか。あの虫に犯され易く、冷気に堪えない温室の花のみを賞めるべきでしょうか。私は見棄てられた自然の花を工藝の世界で弁護しようとするのです。誰も見ていながら見忘れているが故に、あえて筆を執ろうとするのです。

(二) 続いてはいわゆる上等の品が余り不当な過信を受けているが故に、それを修正しようとするのです。今日の工藝史を見ると多くの讃辭に包まれながら、高い位置を得ているのは、大概は貴族的な品物なのです。また人々が競つて集めようとしているものも同じなのです。これはその市価が極めて高いのによつても知ることができます。これに反し民藝品の大部分には、ほとんど市価らしいものさえ未だないのです。(私はいかにもつたない気持ちで以て、それ等のものを夥しく非常に安く手に入れ得たでしょう！)

もとより幾種かの美しい上等な品を私も熟知しています。特に初期に属する単純なものに卓越したものをしばしば見かけます。だが後世の大部分のものは人為的作物であるため、疾病がはなは多いのです。意識の超過や作為の誤謬に陥っていないものは稀の稀だと云わねばなりません。有想の域に止まつて加工の重荷に悩んでいます。^⑥ いわゆる上等品に見られる通有の欠陥は技巧への腐心なのです。したがつて形も模様も錯雑さを増して来ます。そこには丹念とか精密とかはありませんが、それは直ちに美のことではないのです。よし美があつても華美に陥る傾きが見えています。したがつて大概は纖弱に流れて生命の勢いが欠けてきます。大部分

が用途には堪えませぬ。しかし用を離れて工藝の意義がありましようか。用い得ないことにおいて、美もまた死んでくるのです。

あの技巧がますます複雑になった後代の蒔絵まきえを見てください。不自然な工程と無益な労力と、生命の枯死とよりほか何ものもないのです。あの官窯かんようであつた清朝の五彩ごさいを見てもそうです。単に驚くべき技巧の発達のみが示されて、美は埋没されてしまいました。あの抹茶器として作られたものを見てください。ひねくれた形、わざとらしき高台こうだい、人はその作為を風雅と誤認しています。そこには病菌の展覧よりほか何ものありません。初代の茶人達が愛した茶器は実に素直な物のみでした。形の歪ゆがめる場合でも、自然が歪めたので、わざと歪めたものではありません。人々はそのお庭焼の如き官窯を推賞し、在銘の作に耽溺たんできします。ですが技巧の歴史直ちに美の歴史ではありません。また個人の歴史すなわち美の歴史ではありません。人々は器を見ずに、名を見、技巧を見ているのです。もし銘をけずり取つたら、いかに多くのものが彼等の讃辞から離れるでしょう。人々の見方には充分な直観の基礎がないのです。いかにそれ等の人々は箱書はこがきに頼っているでしょう。民衆の器物が、受けるべき価値以下に忘れられているのに対し、富貴な品は、受けるべき価値以上に認められているのです。これは修正されねばならぬというのが、私の主張なのです。

(三) 以上はなぜ私が特に民藝を語るかの消極的理由です。もとより直観の前には上下の差別はありません。それが何物であろうとも、美しい物は美しく醜い物は醜いのです。今直観の鏡の前にすべてのものを素裸にして示す時、私はいかに貴族的なものに美しいものが少なく、かえつて民器に美しいものが多いかを見誤ることができません。焼物にせよ、織物にせよ、木工品にせよ、真に美しいほとんどすべての作は無銘品なのです。在銘のものでそれ等のものに比べ得るものは真に稀有けうだと云つていいのです。このことは私に次の明確な事実を教えてください。富貴の品物たることにはいかに病いが多いかを。そうして民衆の品物たることにはいかに健康やかさが多いかを。

進んではこうも云えます、民藝の中にこそ工藝の美が、より安定に保証されているのだと。したがって「民藝品たること」と「美しい作たること」とには堅い結縁けちえんがあるのです。これに反し貴族的な品が美しい作となるのは極めて困難なのです。今日までさげすまれてきた民器にこそ、かえつて高い美が約束されているのです。美への見方の驚くべき一転倒ではありませんか。あえて民藝につ

いて語る積極的理由を、私は隠匿することができないのです。

⑦なぜ特別な品物よりかえって普通の品物にかくも豊かな美が現れてくるか。それは一つに作る折の心の状態の差異によると云わねばなりません。前者の有想よりも後者の無想が、より清い境地にあるからです。意識よりも無心が、さらに深いものを含むからです。主我の念よりも忘我の方が、より深い基礎となるからです。在銘よりも無銘の方が、より安らかな境地にあるからです。作為よりも必然が、一層厚く美を保証するからです。個性よりも伝統が、より大きな根底と云えるからです。人知は賢くとも、より賢い叡智えいちが自然に潜むからです。人知に守られる富貴な品より、自然に守られる民藝品の方に、より確かさがあることに何の不思議もないわけです。華美よりも質素が、さらに慕わしい徳なのです。身を飾るものよりも、働くものの方が常に健康なのです。錯雑さくさつさよりも単純なものの方が、より誠実な姿なのです。華やかさよりも渋さの方が、さらに深い美となつてきます。なぜ民藝品が「美しい民藝品」となる運命を受けるか、そこには極めて必然な由来があると云わねばなりません。工藝の美を語る者が民藝を解することを怠おろそかしていないでしょうか。

(四) 私は眼を転じていわゆる上等品の中、美しい作を取り上げてみましょう。何がそれを美しくさせているかを省みてみましょう。この時私は次の事実を見出さないわけにはゆかないのです。実にそれ等の美しいものに限つて、その所産心が全く民藝品と同じ基礎に立っているのを発見します。無駄をはぶいた簡素、作為に傷つかない自然さ、簡単な工程、またはそこに見られる無心の豊かな模様、健全な確かな形、落ち着いた深みある色、全体を包む単純の美、それは民藝品を美しくさせているその同じ原理が働いているからではないでしょうか。貴族的なものでは古い時代のものにいいものが多いのです。それは技巧がまだ進んでおらず、稚拙な味わいがあるからだと云えるのです。

(中略)

工藝史家は今日までほとんど貴族的なものにのみ過重な注意を払うことによつて、工藝そのものへの理解を喪失してしまいました。彼等には全く美の標的がないのです。いかにしばしば等しい讃辞を、美しいものと醜いものとに平等に献ささげてきたでしょう。これは

ど不平等な歴史観がありましたでしょうか。就中^{なかんずく}個人的在銘の作に彼等の注意が集まっています。しかしそれは工藝史を極めて狭い一隅に追いやると同じなのです。それも工藝史の一部を占めるでしょうが、むしろ傍系に属すべきものと云っていいのです。民藝が公道なのです。工藝の正史は民藝史なのです。

ちょうど宗教の精髓が、複雑な神学に在るよりも無心な信仰に在るのと同じなのです。信仰史が宗教の正史なのです。信仰の前に神学は二次なのです。同じように無心な民藝の美に対して、個人の意識的な作は二次なのです。なぜなら無心は意識よりも、もっと深いものを捕えるからです。民器の美に向かって官器の美は二次なのです。民衆より生まれ民衆に役立つ雑具にこそ工藝の正道があり大道があるのです。それ故、民藝の問題が工藝の根本問題なのです。工藝論は新しく出発せねばなりません。^⑧工藝美の歴史は書き改められねばなりません。私達は工藝の正史を綴^{つづ}るべき任務を帯びているのです。

* 柳宗悦……日本の美術評論家、思想家。民藝運動の主唱者。

* 組合……親方、職人、徒弟から成る商工業者の特権的同業団体で、中世のヨーロッパの都市において発達した。ギルド。

* 闡明……明瞭でなかった道理や意義を明らかにすること。

【問1】二重傍線①～⑤の漢字はその読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に改めなさい（楷書で、丁寧に書くこと）。

- ① ハイイ ② ブベツ ③ 漸次 ④ ガンジョウ ⑤ セイチ

【問2】傍線①「工藝の諸問題のうちで、過去に対しても将来に向かって、一番意味深い対象となるのは民藝の問題なのです」

とありますが、それに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(ア)～(ク)の記号で答えなさい。

漆器・陶磁器や織物など、日常的な雑貨・道具でありながらも美術品としての魅力がそなわっているものを一般に工藝（工芸）といいます。また、工藝のなかでも一般民衆の生活から生まれたものを民衆的工芸品、すなわち民藝（民芸）といいます。従来、人々の生活に密着している民藝は、それゆえにaなものであると思われがちでした。この文章の趣旨は、それまで見過ごされていた民藝のbな価値をうったえることにあります。筆者の柳宗悦によれば、民藝に目を向けずにcな工藝のみをありがたがるのは間違った態度に他なりません。柳の主張はむしろ、工藝におけるdを追求するためにこそ民藝に目を向けるべきだ、というものです。

このような柳の主張は、その後の美術界・思想界に大きな影響を与えました。現在、柳の主張を踏まえるさいには、「民芸（品）」の一般的な意味合い（例えば、郷土の土産物といったような）から区別するかたちで、旧字の「民藝」を用いることが多くなっています。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| (ア) 悪習 | (イ) 下等 | (ウ) 完璧 | (エ) 象徴 |
| (オ) 深刻 | (カ) 真理 | (キ) 美的 | (ク) 富貴 |

【問3】 傍線②「何人もこの問題に触れることなくしては、工藝論を組み立てることができないのです」とありますが、どうい

なんびと

ことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 民藝は民衆が作り上げるものであり、工藝を語るためには鑑賞だけではなく実際に作る必要がある、ということ。
- (イ) 実用的であることが工藝の本質である以上、工藝を論じる際にはかならず民藝に目を向けるべきだ、ということ。
- (ウ) 民藝品は経済的価値が上がる可能性が高いので、工藝論にはぜひとも民藝を組み入れるべきである、ということ。
- (エ) 工藝における華麗な美しさを理解できない人は、民藝について議論することなどとうていできない、ということ。
- (オ) 日常の生活品である民藝を使用したことのない人は、そもそも工藝について議論をする資格がない、ということ。

【問4】 空欄A・Bに当てはまる語を次の中から選び、それぞれ(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) もし (イ) 例えば (ウ) ところで (エ) 何故なら (オ) したがって
- (エ) なぜ

【問5】 傍線③「許し難い不注意」に関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(ア)～

(ク)の記号で答えなさい。

世間一般の人々には、すでに評価が定まった a 的なものばかりをありがたがり、 b のいとなみを見下すような傾向が少なからずあります。例えばわたしたちは、高名な建築家がつった歴史的建造物にはやすやすと芸術性を見出すにもかかわらず、一般の人が暮らしている民家に対して同じような視線を向けようとはしません。

本文における「許し難い不注意」という表現は、このようなわたしたちの、目に映っているにもかかわらず見過ごしてしまうような態度を想定してのものでしょう。ともすれば見落としがちですが、「民藝(民芸)」という言葉には、「藝術(芸術)」の「藝(芸)」の字が含まれています。この文章のインパクトは、これまで見落とされてきた民藝の芸術的な価値を c することによって、工藝をめぐる従来の価値観を d させている点にあると言えます。

【問6】 空欄C～Fに当てはまる語を次の中から選び、それぞれ(ア)～(ク)の記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| (ア) 移動 | (イ) 権威 | (ウ) 庶民 | (エ) 政治 |
| (オ) 増加 | (カ) 転倒 | (キ) 道徳 | (ク) 発見 |
| (ア) 陰気 | (イ) 単純 | (ウ) 偽物 | (エ) 無名 |
| (オ) 陽気 | (カ) 複雑 | (キ) 歴代 | (ク) 名工 |

【問7】 傍線④「同じように民器と然らざるものとは心の置き場が異なるのです」とありますが、どういうことですか。最も適当

なものを次の中から選び、(ア) (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) 民器の作り手には、従来の伝統的な価値観にとらわれない個性的で自由な心が必要とされる、ということ。
- (イ) 伝統への敬意がない作り手には、美術家が作るような美しい民器を生み出すことができない、ということ。
- (ウ) 伝統をそのままに踏襲する民器の作り手は、美術家とは違って自我を前面に出すことはない、ということ。
- (エ) 民器の作り手が使い勝手を気にするのに対し、美術家は展覧会の評価ばかりを気にしている、ということ。
- (オ) 作り手の特別な美意識が存在しない作品には、民器としての美しさを認めることができない、ということ。

【問8】 傍線⑤「一般の美への見方は因襲的であって創造がありません」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを

次の中から選び、(ア) (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) 世間の人は美しさに対して受動的な態度を取り、自分から美しい作品を生み出そうとはしない、ということ。
- (イ) 多くの人はすでに知っていることを確認するばかりで、未知の出来事に目を向けようとしない、ということ。
- (ウ) 一般的な美しさは生活習慣のなかに見出されるのであり、新しい物事のなかには存在し得ない、ということ。
- (エ) 多くの人は世間の評価をそのまま受け入れているだけで、自分なりの価値基準を持っていない、ということ。
- (オ) 一般人は古くから伝えられてきた風習を守っているだけで、新しいことに挑戦することがない、ということ。

【問9】 傍線⑥「いわゆる上等品に見られる通有^{つうゆう}の欠陥は技巧への腐心なのです」とありますが、どういことですか。最も適当

なものを次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 上等品の欠点は、技巧を上達させようとする意志がまるで感じられないことなのだ、ということ。
- (イ) 欠点の多い工藝であっても、時間をかけて技巧が磨かれることで上等品になるのだ、ということ。
- (ウ) 実用品としての使いにくさを、職人の技巧によって克服したものこそ上等品である、ということ。
- (エ) どんなに美しい工藝品であっても、技巧に対する努力がなければ上等とは言えない、ということ。
- (オ) 上等品はおしなべて技巧にこだわるが、その意識こそが作品の欠点に結びつくのだ、ということ。

【問10】

傍線⑦「なぜ特別な品物よりかえって普通の品物にかくも豊かな美が現れてくるか」とありますが、それに関する次の説明文の空欄 a ～ c に当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(ア) ～ (カ) の記号で答えなさい。

次に引用する文章は、評論家の前田英樹が、柳宗悦の民藝に関する捉えかたについて論じた文章です。ここでは〈芸術〉というものに対する柳の疑念が紹介されていますが、それは、本文における「特別な品物」に対する低評価ともつながるものです。前田は次のように述べています。

《このような〈芸術〉に対する柳の疑いは、あくまでも根本的なものである。常軌を逸したところに成り立つ個性的天才などは、実にありふれた a であり、ほとんど空想に過ぎない。そういう天才像は、近代社会が私たちに容認している一種のはけ口、私たちの味気ない機械化した暮らしのはけ口に過ぎないだろう。

工藝の「美」は、よく役立つ器物だけが持つている美しさである。このことは、変わることのない真実だろう。これを作るのに天才は要らない。要るのは、膨大に繰り返される労働であり、それへの b と、手の器用さであり、それを支える c であり、その暮らしを支える信仰心である。》

(前田英樹『民俗と民藝』講談社選書メチエ、二〇一三年)

前田の指摘は、柳が「普通の品物」たる民藝の背後に労働を見ていることを教えます。このことは、本文にある「働くものの方が常に健康なのです」という一節にも呼応しています。

- | | | | | | |
|-----|-------|-----|--------|-----|----------|
| (ア) | 学習の成果 | (イ) | 政治的な運動 | (ウ) | つましい暮らし |
| (エ) | 近代の産物 | (オ) | 限らない熟達 | (カ) | ぜいたくな暮らし |

【問11】

傍線⑧「工藝美の歴史は書き改められねばなりません」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

筆者の柳宗悦による民藝の評価は、単に好みや趣向の問題にとどまりません。筆者は最後のほうで、民藝を「無心な信仰」になぞらえてもいますが、ここからうかがえるのは、

- (1) (ア) 工藝において個人的な作為は必要ない
(イ) 工藝は神への供物でなければならぬ
(ウ) 工藝に過剰な信心を抱くべきではない
- という筆者の考えです。

さらにそれが、「神学」と対比されつつ、「信仰」という日々のいとなみと重ねられている点を強調するならば、

- ここには (2) (エ) 工藝のために日々学問にはげむべきである
(オ) 工藝は信仰の歴史に明記される必要がある
(カ) 工藝は民衆の具体的な暮らしとともにある
- という主張が含意されていると言えます。

筆者によって示される、この「工藝美の歴史」は、美術品としての工藝の歴史を民藝の側から捉え返すかたちで示されています。だとすれば、その捉え返しは、

- (3) (キ) 工藝を理解していない民衆にその歴史を啓蒙すること
(ク) 工藝を貴族や専門家の手から民衆の手に取り戻すこと
(ケ) 実用的な民藝に貴族的工藝としての権威を与えること
- を意味します。「民藝運動」とも呼ばれた柳の

民藝再評価は、その意味で、民主的な社会運動の一環と捉えることができるでしょう。

柳は実際、このような民藝的な美を生み出すことのできる社会こそを理想的な社会だと考えました。

手触りもないまま、なんでもいかようにも売り買いできてしまうような現代、わたしたちは、消費と労働のありかたについてあらためて考える必要があります。柳の民藝をめぐる議論は、そんなわたしたちに対して、なにより、

(4)

- (コ) 地に足をつけた生活とともに思考すること
- (サ) 誇るべき日本独自の伝統を守り続けること
- (シ) 移ろいゆく価値観を柔軟に受け入れること

を求めていると言えるでしょう。

II

次の文章は、安部公房が書いた「赤い繭」という短編小説です。これを読んで、以下の設問に答えなさい。

① 日が暮れかかる。人はねぐらに急ぐときだが、おれには帰る家がない。おれは 家と家との間の狭い割れ目をゆっくり歩き続ける。街中こんなに沢山の家が並んでいるのに、おれの家が一軒もないのは何故なぜだろう？……と、何万遍かの疑問を、また繰り返しながら。電柱にもたれて小便をすると、そこには時折縄の切れ端なんか落ちていて、おれは首をくくりたくなった。縄は横目でおれの首をにらみながら、兄弟、休もうよ。③ まったくおれも休みたい。だが休めないんだ。おれは縄の兄弟じゃなし、それにまだ何故おれの家がないのか納得のゆく理由がつかめないんだ。

④ 夜は毎日やってくる。夜が来れば休まなければならない。休むために家がある。そんならおれの家がないわけがないじゃないか。ふと思いつく。もしかするとおれは何か重大な思いちがいをしているのかもしれない。家がないのではなく、単に忘れてしまっただけなのかもしれない。そうだ、ありうることだ。例えば……と、偶然通りかかった一軒の前に足を止め、これがおれの家かもしれないではないか。むろん他の家とくらべて、特にそういう可能性をおわせる特徴があるわけではないが、それはどの家についても同じように言えることだし、またそれはおれの家であることを否定するなんの証拠にもなりえない。⑤ 勇気をふるって、さあ、ドアを叩こう。
な

運よく半開きの窓からのぞいた親切そうな女の笑顔。希望の風が心臓の近くに吹き込み、それでおれの心臓は平たくひろがり旗になつてひるがえる。おれも笑って紳士のように会釈した。

A

「女の顔が急にこわばる。「あら、どなたでしょう？」」

おれは説明しようとして、はたと行き詰まる。なんと説明すべきかわからなくなる。おれが誰だであるのか、そんなことはこの際問

題ではないのだということを、彼女にどうやって納得させたいだろうか？ おれは少しやけ気味になって、

「B」

「まあ……」と女の顔がおびえる。それがおれの癢しやぐにさわる。

「C」

「でも、ここは私の家ですわ。」

「D」

返事の代わりに、女の顔が壁に変わって、窓をふさいだ。ああ、これが女の笑顔というやつへんぼうの正体である。誰かのものであるということが、おれのものでない理由だという、訳の分からぬ論理を正体づけるのが、いつものこの変貌へんぼうである。

だが、何故……何故すべてが「E」であり、「F」ではないのだろうか？ いや、「F」ではないまでも、せめて

「G」が一つくらいあってもいいではないか。時たまおれは錯覚した。工事場や材料置き場の*ヒューム管がおれの家だと。

しかしそれらはすでに「E」になりつつあるものであり、やがて「E」になるために、おれの意志や関心とは無関係にそ

こから消えてしまった。あるいは、明らかにおれの家ではないものに変形してしまった。

では公園のベンチはどうだ。^⑥むろん結構。もしそれが本当におれの家であれば、^⑦棍棒こんぼうをもった彼が来て追い立てさえしなけれ

ば……たしかにここはみんなのものであり、誰のものでもない。だが彼は言う。

「こら、起きろ。ここはみんなのもので、誰のものでもない。ましてやおまえのものであろうはずがない。さあ、とつとと歩くんだ。

それが嫌なら法律の門から地下室に来てもらおう。それ以外のところで足をとめれば、それがどこであろうとそれだけでおまえは罪を犯したことになるのだ。」

*さまよえるユダヤ人とは、すると、おれのことであつたのか？

日が暮れかかる。おれは歩き続ける。

家……消えうせもせず、変形もせず、地面に立って動かない家々。その間のどれ一つとして定まった顔を持たぬ変わり続ける割れ目……道。雨の日には刷子ブラシのようにけば立ち、雪の日には車のわたちの幅だけになり、風の日にはベルトのように流れる道。おれは歩き続ける。おれの家がない理由がのみ込めないのです、首もつれない。

おや、誰だ、おれの足にまつわり付くのは？ 首つりの縄なら、そうあわてるなよ、そう⑧せかすなよ、いや、そうじゃない。これはねばりけのある絹糸だ。つまんで、引つ張ると、その端は靴の破れ目の中にあつて、いくらでもずるずるのびてくる。こいつは妙だ。と好奇心にかられてたぐりつづけると、更に妙なことが起こった。次第に体が傾き、地面と直角に体を支えていられなくなった。地軸が傾き、引力の方向が変わったのであろうか？

コトンと靴が、足から離れて地面に落ち、おれは事態を理解した。地軸がゆがんだのではなく、おれの片足が短くなっているのだ。糸を⑨たぐるにつれて、おれの足がどんどん短くなっていた。すり切れた＊ジャケツの肘ひじが⑩ほころびるように、おれの足がほぐれているのだ。その糸は、糸瓜へちまのせんいのように分解したおれの足であったのだ。

もうこれ以上、一步も歩けない。途方にくれて立ちつくすと、同じく途方にくれた手の中で、絹糸に変形した足が独りでに動きはじめていた。するすると這はい出だし、それから先は全くおれの手をかりずに、自分でほぐれて蛇のように身にまきつきはじめた。左足が全部ほぐれてしまうと、糸は自然に右足に移った。糸はやがておれの全身を袋のように包み込んだが、それでもほぐれるのをやめず、胴から胸へ、胸から肩へと次々にほどけ、ほどけては袋を内側から固めた。そして、ついにおれは消滅した。

後に大きな空っぽの繭が残った。

ああ、これでやっと休めるのだ。夕日が赤々と繭を染めていた。これだけは確実に誰からも妨げられないおれの家だ。だが、

H

繭の中で時がとだえた。外は暗くなつたが、繭の中はいつまでも夕暮れで、内側から照らす夕焼けの色に赤く光っていた。⑪この目立つ特徴が、彼の目にとまらぬはずがなかった。彼は繭になったおれを、汽車の踏切とレールの間で見つけた。最初腹を立てたが、

すぐに珍しい拾いものをしたと思いなおして、ポケットに入れた。しばらくその中をごろごろした後で、彼の息子の玩具箱おもちゃばこに移された。

*ヒューム管……………鉄筋コンクリート製の管。下水道や灌漑用水などに用いられる。

*さまよえるユダヤ人……刑場へ引かれていくキリストに暴言をあげせた一人のユダヤ人が、キリストの再臨まで死ぬことを許されず、永遠に世界をさまよい歩くことになった、というヨーロッパの伝説。

*ジャケツ……………ジャケット。上着の総称。

【問1】

傍線①「日が暮れかかる」とありますが、以下は、この冒頭の一文に関する説明文となります。空欄 a・b に当てはまる語を後の選択肢より選び、それぞれ (ア) ～ (カ) の記号で答えなさい。

夜がやって来る。夜が来れば、休まなければならない。しかし、休むためには家がある。なのに、「おれ」には家がない。だから、夜が近づいてきた今、「おれ」は自分の帰るべき家がないことに憤りや a を覚えながら、たくさんの家が建ち並ぶ街をさまよい歩く。そして、こんなにたくさんの家があるのだから、どこかに自分の家もあるはずだという b にすがりながら、「おれ」は街をさまよい歩くのである。

(ア) 劣等感

(イ) 危険性

(ウ) 幸福感

(エ) 可能性

(オ) 焦燥感

(カ) 普遍性

【問2】

傍線②「家と家との間の狭い割れ目」とありますが、どういうことですか。次の説明文を読み、空欄 a・b に当てはまる言葉を、それぞれ漢字1文字で答えなさい。また、空欄 c・d に当てはまる言葉を次の説明文の中から抜き出し、それぞれ

漢字1文字で答えなさい。



「狭い割れ目」というのは、もちろん a のことです。では、なぜ a が「割れ目」と表現されるのでしょうか。それは、「おれ」が b を探し求めている男だからです。「おれ」の目は、常に b を物色しています——どこかに「おれ」のものがあ

るはずだ、と必死になって。上の絵を見てください。これは「ルビンの壺」と呼ばれる有名な絵です。真ん中の黒い部分は、「壺」に見えませんか？ この時、黒い部分が「図」であり、白い部分は「地」（＝背

景）となっています。でも、左右の白い部分を「図」として捉えると、今度は「二人の人間の横顔」が見えてきませんか？ この時、黒い部分（さつきは「壺」に見えた部分）は「地」となり、「壺」の絵（＝「図」）としては認識されなくなっているのです。

では、「おれ」の場合は、どうでしょうか。「おれ」は必死になって自分の b を探し求めています。そんな「おれ」の知覚・意識の中では、左右に立ち並ぶ建物が「c」として前景化されているはずです。この時、それらの狭間にある a は、「d」として背景化することになります。「家と家との間の狭い割れ目」という表現は、そんな「おれ」の意識のありよう・認識のありようと関わっているのだと言っていていいでしょう。

【問3】 傍線③「まったくおれも休みたい。だが休めないんだ」とありますが、「おれ」のこの言葉はどのように解釈できますか。

次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) 首をくくって死ねば、たしかに今ある苦しみから解放されて、「おれ」は楽になれるだろう。だが、それは自分のこれまでの人生を否定することと同じではないか。

(イ) 「おれ」が休めるのは、自分の家が見つかった時である。自分の家が見つかるまでは、たとえ首をくくったとしても、「おれ」は楽になることなどできないんだ。

(ウ) 自分が休むための家は、この世のどこにもないのだとはっきりしたら、「おれ」もあきらめよう。その時はこの首をくくって、あの世でゆっくり休むことにするさ。

(エ) 「おれ」は自分の家の中で、首をくくりたい。だから、街の中に建ち並ぶ沢山の家の中から、「おれ」は自分が首をくくるための家を見つけないといけないんだ。

(オ) どこかにはあるはずの「おれ」の家が、「おれ」に「休むな」と言うんだ。だから、「おれ」は自分の家と再会できる日まで、休まず歩き続けなければならないのさ。

【問4】

傍線④「夜は毎日やってくる。夜が来れば休まなければならない。休むために家がある。そんならおれの家がないわけがないじゃないか」とありますが、以下の説明文の空欄 a ～ e には、(ア)「正しい」、(イ)「正しくない」のいずれかが入ります。「正しい」が当てはまる場合には (ア)、「正しくない」が当てはまる場合には (イ) の記号で答えなさい。

「おれ」は、こう言います——「夜は毎日やって来る」と。

では、「夜」って何でしょうか? 「日没から日の出までの時間」「太陽が沈み、暗くなっている時間帯」というのが国語辞典の説明です。太陽は毎日、東の空から昇り、夕方になると西の地平線に沈んで、そして夜がやって来ます。だから、私たちが暮らす日本という国においては、「夜は毎日やって来る」という言い方は a と言っていいでしょう。

でも、南極圏や北極圏だったら? ——北極圏では、夏になると太陽が一晚中沈まない日が続きます。太陽が出ているので、空が真つ暗になることもあります。白夜です。つまり、北極圏の白夜の季節であれば、「夜は毎日やって来る」という言い方は b、ということになるでしょう。

また、「おれ」は、こう言います——「夜が来れば休まなければならない」と。

でも、深夜に働いてくれる人が必要な職場って、ありませんか? 消防署や病院などは、そうですね。また、現代の日本には、コンビニなど、24時間オープンしているお店だってあります。つまり、現代の日本社会においては、夜が来ても休めない人たちがいる、という言い方は c ということになるでしょう。

また、「おれ」は、こう言います——「休むために家がある」と。

「休む」とは、「心身を楽しむ」「くつろぐ」ということですが、雨の日であれば、やっぱり屋根が必要ですよ。風の強い日だったら、壁がほしくなります。また、「休む＝寝る・眠る」ということであれば、身体を横にして休めるだけのスペースがほしいですよ。寒い日なら、蒲団ふとんもほしくなります。だとすれば、「休むためには家がある」とい

う「おれ」の考えは d、と言ってもいいのではないだろうか。

そして、「おれ」は最後に、こう言います——「そんならおれの家がないわけがないじゃないか」と。

「休むためには家がある」としても、でも^{すべて}全ての人に家が与えられているとは限りません。実際に、自分が住むための、自分の家屋を持っていない人たちもいます。例えば、公園、河川、道路などを、自分が日常生活を営む場所としている人たちなどです。だとすれば、「休むためには家がある」のだから「おれの家がないわけがない」、という「おれ」の考えは、必ずしも e とは言えないでしょう。

【問5】

傍線⑤「勇気をふるって、さあ、ドアを叩こう」とありますが、なぜ「おれ」は「ドアを叩こう」と決意するに至ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) 目の前にある家が、「おれ」の家だという確たる証拠はない。けれども、目の前にある家が、やはり「おれ」の家であるという可能性は、十分にあるはずだと考えたから。

(イ) 目の前にある家が、「おれ」の家でないのは明らかである。しかし、これが「おれ」の家だと念じること、目の前の家が「おれ」の家に変貌する可能性もあるはずだから。

(ウ) どの家も、同じような外観をしている。だとすれば、「おれ」の家も、目の前にある家とよく似ているはずで、よく似ているなら、それは「おれ」の家であるに違いないから。

(エ) どの家も誰かの家であり、それらが「おれ」の家である可能性はない。だとしても、この世に「おれ」の家がない、などという理不尽な現実を納得することなどできないから。

(オ) 目の前にある家には、これといった特徴もない。だが、個性がないからこそ、誰かの家であることを主張している家に比べて、「おれ」の家である可能性は高くなると考えたから。

【問6】 空欄A～Dに当てはまる会話文を次の中から選び、それぞれ（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

（ア） 証拠がないなら、私の家だと考えてもいいわけですね。

（イ） 一寸^{ちよつと}かがいたのですが、ここは私の家ではなかったでしょうか？

（ウ） ともかく、こちらが私の家でないとお考えなら、それを証明していただきたいのです。

（エ） それがなんだっていうんです？ あなたの家だからって、私の家でないとは限らない。そうでしょう。

【問7】 空欄E～Gに当てはまるものを次の中から選び、それぞれ（ア）～（エ）の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度

以上用いてはいけません。

（ア） おれのもの

（イ） 誰かのもの

（ウ） どこにもないもの

（エ） 誰のものでもないもの

【問8】傍線⑥「むろん結構」とありますが、「おれ」という意味で「結構」と言っているのだと考えられますか。次の中から

最も適当なものを選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 公園のベンチは家とはいいがたいから、ちよつと遠慮しておきたい、ということ。
- (イ) 棍棒を持った男に追い立てられるから、公園のベンチは願ひ下げだ、ということ。
- (ウ) 公園に置いてあるベンチが自分の家だなんて、冗談にもほどがある、ということ。
- (エ) それが自分のものであるならば、公園のベンチであっても構わない、ということ。
- (オ) 公園のベンチで休むことができるのならば、これ以上の幸せはない、ということ。

【問9】傍線⑦「棍棒をもった彼が来て追い立てさえしなければ」とありますが、「棍棒を持った彼」とは何者だと考えられます

か。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 地獄に墜ちた亡者を責めさいなむ鬼のような、見るからに恐ろしい姿をした大男。
- (イ) 風紀を乱す者を取り締まったり、そうした者を排除したりする権限を与えられた者。
- (ウ) 恫喝や暴力などを用いて相手を自分の意のままにしようとする、反社会的な人間。
- (エ) 自分が所有する土地をみんなが集える公園として無償で提供している、街の資産家。
- (オ) 子どもやお年寄りの安全を守るために、一日中、公園内を見回っている自警団員。

【問10】

傍線⑧「せかす」、傍線⑨「たぐる」、傍線⑩「ほころびる」とありますが、ここではどのような意味で用いられていますか。次の中から最も適当なものを選び、それぞれ（ア）～（カ）の記号で答えなさい。

- （ア） 手元へ引き寄せる。
- （イ） 人をいらだたせる。
- （ウ） 催促して、急がせる。
- （エ） じょじょに小さくなる。
- （オ） 縫い目などがほどける。
- （カ） 緊張がとれて、やわらぐ。

【問11】

空欄Hに当てはまる表現として最も適当なものを次の中から選び、（ア）～（オ）の記号で答えなさい。

- （ア） おれはやがて羽化して、家を捨てることになるのだ
- （イ） 家に入りたくとも、この家には出入口がなかった
- （ウ） 家が出来ても、今度は帰ってゆくおれがない
- （エ） おれのものもみんなのものも、誰のものでもない
- （オ） 足を失って歩けないおれは、地下室行きに違いはない

【問12】

傍線⑪「この目立つ特徴が、彼の目にとまらぬはずがなかった」とありますが、どういうことですか。以下の説明文を読んで、空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢より選び、それぞれ（ア）（イ）（エ）の記号で答えなさい。

「この目立つ特徴」とは、繭になってしまった「おれ」が a ということであるでしょう。でも、繭になる以前から、「おれ」には、そのような特徴が備わっていたのだと考えられます。そして、その特徴は、「おれ」を

b ものだったのではないのでしょうか。

「みんな」は、公園のベンチで休んでも、「棍棒を持った彼」に咎められたり、追い立てられたりすることはありません。でも、「おれ」がベンチで休もうとすると、「棍棒を持った彼」が飛んできて、「おれ」を追いつけるのです。なぜ、「棍棒を持った彼」は「おれ」に目をつけるのでしょうか。

それは、「おれ」が a からではないかと思っています。繭になる前の「おれ」にも、その目立つ特徴があったに違いありません。いつもいつも、自分の家を探している男。でも、家を見つけたことが出来ずに、いつもいつも、さまよい続けている男――。彼は、いつも、 c のではないのでしょうか。それは夕方とか夕暮れ時とか日暮れ時と呼ばれる時間であり、晴れた日なら空が赤い色に染まる時間帯です。

「棍棒を持った彼」は、「おれ」にこう言います――「ここはみんなのもので、誰のものでもない。ましてやおまえのものであろうはずがない」と。「ましてや」という表現に注目してください。「他の人＝一般の人たちでさえ、ダメなのだ。だから、お前なんかが、このベンチで横になろうなんて、許されるはずがない！」ということです。「棍棒を持った彼」は言います――「さあ、とっとと歩くんだ。それが嫌なら法律の門から地下室に来てもらおう。それ以外のところで足をとめれば、それがどこであろうとそれだけでおまえは罪を犯したことになるのだ」と。

「おれ」は、「みんなのもの」であるはずのベンチで休むことさえ許されません。「おれ」とは、「みんな」と同じよう

な d 人間なのです。

ところで、二〇二一年に東京オリンピックが開催されましたが、オリンピック開催に関連して、都心部では住所不定で行き場のない人たちが公園などから排除されたといいます。また、最近では駅や公園のベンチに仕切りや突起を付けるのが当たり前ようになってきていますが、その仕切りや突起には、定まった住居を持たない人たちが寝そべらないようにしたい、という意図が含まれているようです。

「ベンチはみんなののだが、おまえがベンチに身体を横たえ、休むことは許されないのだ。公園はみんなのものだが、おまえが公園で夜を明かすことは許されないのだ」と、追いついてられる人たち——。なぜ、その人たちは追いついてられないのでしょうか。街の美観を損なうから……。目障りな存在・不快な存在であるから……。

安部公房という作家が書いた「赤い繭」という短編小説は、一九五〇年に発表されました。今から、七五年も前のことです。でも、現代の日本社会と重なり合うような内容を持った作品だと思いませんか？

- | | | | | | |
|-----|------------------------------|-----|------------|-----|-------------|
| (ア) | からつぽの繭である | (イ) | 糸をたぐり寄せ続ける | (ウ) | 権利が認められていない |
| (エ) | 赤い光を帯びている | (オ) | ベンチに身を横たえる | (カ) | 他の人間たちと区別する |
| (キ) | 夜の闇 <small>やみ</small> に閉じ込める | (ク) | 夜の手前の時間にいる | (ケ) | 自分の家を持っていない |

【出典】

- Ⅰ 柳宗悦『民藝とは何か』（講談社学術文庫、二〇〇六年）二〇～三五頁 ※ただし、問題作成の都合上、一部省略したところがある。

- Ⅱ 安部公房「赤い繭」、『安部公房全集2』（新潮社、一九九七年）四九二～四九四頁